

# 蜷川幸雄

彩の国さいたま芸術劇場 芸術監督・演出家

# サケ ンラ ドリ ロ ヴィ ッチ

ナイロン100°C主宰 劇作家・演出家

公開対談シリーズ第15回

## NINAGAWA 千の目

真夏の昼下がり派手なシャツに金髪で登場したケラさんは、  
蜷川幸雄という空間で静かにゆっくり揺れていた。  
そして、二人の約束が公表されたのだった。

### ケラリーノ・サンドロヴィッチという真面目な虚

**蜷川(以降 N)** ケラさんはすぐれたミュージシャンであり、劇作家であり、演出家であり、映画監督です。彼は、「埼玉は遠いな」と絶対に言うに決まっていますが、今日ははるばる来ていただきました。

**KERA(以降 K)** こんにちは。こんなところによく通っていますね。いやあ、遠い(笑)。

**N** 絶対に言うと思った！でも、なかなかこういう機会でない、ケラさんの実像に触れることもないし、どうせ嘘ばかりだと思いますが(笑)。

この虚実入りまじったところがケラさんで、そもそもケラリーノ・サンドロヴィッチとは何者ですか？

**K** 僕が日本人だということは、もういいかげん定着しているのではないですか。でも、いまだに地方でふらっと公演の空き時間に地方の書店に行く、ためですね。まだ海外文学のところ、ニール・サイモンの隣とかにあります(笑)。

今日お会いするので一昨日慌てて、蜷川さんが監督をされた「蛇に

ピアス」の試写会に行きました。あれは、あの、CG がすごいですね。

**N** 何だよ。CG がすごいということは、ばかにしているということ？

**K** 舌に穴をあけてピアスをするのですが、普通にリアルに舌が二つに割れていたり、穴を開けて広げたりするんです。見ていて痛くなるくらいですよ。いやあ、すごかった、CG が。それにしても、舞台が渋谷のセンター街ですからね。

**N** 「蜷川さん、世代的なギャップを感じませんか」とよく言われるんだよ。「野田やケラと僕は同じ世代だと思っているよ」と言ったら、相手からは「そんなことないですよ」と(笑)。

**K** 「蛇にピアス」のプレスリリースに書いてありましたが、普通に考えると、映画会社はもっと原作者と同世代の人に撮らせることを考えると思います。そのほうが共有するものが多いだろうと考えますよ。それを蜷川さんが、本来なら(蜷川)実花が撮るべきかもしれないけれど、俺だって撮ってもいいだろうみたいなことを言いながら撮っているのがとてもかわいいと思いました。

**N** うるせーよ。

## 若い演劇人が彩の国に来てくれて、いろいろ話を聞いたら 本当にうれしいと思っています(蜷川幸雄)

### 僕が脚本家という仕事でみつめている世界

**N** 『道元の冒険』というのをいま上演していますが、台本が全部できたのが稽古の初日の朝でした。古い台本はあって、途中まで直してあった。そこに“てにをは”から、カット、入れ換えと、さらに直しが入りました。その直しがこんなに丁寧なんだったら、間違っ言うわけにはいかないよな、というぐらいしつこいわけです。やっぱりそのくらい、ケラさんも“てにをは”や点丸にこだわりますか。

**K** 僕は言葉にはもの凄くこだわるほうだと思います。冗談ではなく、台本が上がる直前は死にそうになりますね。“てにをは”でということでもないけれども、ギャグ一つとか、台詞の語順とか一つで一晩中悩んだりすることはあります。種火がともるといふか、何かいけると思わないと1行目が書けないのです。というか、書けはするのですが、翌朝破棄したくなってしまいます。でも端から見るとその灯がともるまでの時間というのは、ただ怠けている時間にしか見えない。何で書き始めない、いつまでも書き始めないから案の定遅くなるではないかと言われるますが、そうではないんだ！というのはいつも作家同士の会話の中だけです(笑)。

**N** 書くということは本当に大変だと思います。僕の演出なんて第二芸術だから、もとがなければ出来ないからといつも言っている。

僕の方はね、芝居の俳優はにっこり笑って、心の中で泣きながら、劇評では台詞を覚え切れない俳優がいるとか書かれて、くそかと思うのもいいと思うんだ。僕はそういうことを逆手に取ってあまり芸術なんて言わないで、捨て身で嘘をつくのはいいなと思っているよ。そのくらいのちゃめっ気です。

**K** 芝居の台本を書くという行為は、自由度が非常に高い。映画とは違って、芝居の台本は第5稿まで書き直せなんて命じられることはまずないですから。物理的に不可能だということもありますが、演劇は非常に自由なメディアなわけですね。だからこそ僕は演劇界に20何年もいるんだと思います。自由過ぎて、本当に最初の一つを選ぶのが、これでいいのだろうかと思うのです。途中いくつもいくつも岐路があって、それをチョイスしていくと…。

**N** 自分がしょっちゅう変わっているんだって、感じるんだ。

**K** はい。せめぎ合いながら書いてゆく中で、いつまで経っても「まだ間に合うのではないかと」思ってしまう。もっと面白いことを思いつけられるような気がしてしまうのです。そうすると、残り稽古日数8日が、あと7日になっても、もう少しねばった方がよいのではないかというように思ってしまう。

**N** 僕は書かない勇気というの、あると思うのだけど。

**K** それが勇気かどうかわかりませんが、1本の作品としてとりあえず体裁を作って出来上がりですと言ってしまうのは簡単とまでは言いませんけど、そんなに大変なことではないと思います。演劇は

残らないメディアのはずだけど、過剰に自分の中には蓄積されていく感があるんです。

僕はよく定期的にこんな夢をみるんです。お客が入らなかったお芝居とか、自分がうまく行かなかったなと思ったお芝居とか、役者がもう一つだと思っていたに違いないお芝居があったとします。その芝居のキャラクターが夢に出てくるのです。彼らが「うまく行かなくて、ごめん」と謝ってきて、それを「いや、君らのせいではないよ」と一生懸命僕がなだめる。「君らは精一杯やったんだ。僕の力が至らなかったのだから」というすごく悲しい夢です。そんな夢を以前はしょっちゅう見ていました。何かあるのです。

**N** 罪滅ぼしなの？

**K** 罪滅ぼしですかね(笑)。

### 僕がもしゴールド・シアターに本を書くとしたら

**K** ゴールド・シアターの台本の話はしたほうがいいですか。結構具体的になってきているのですが。(拍手)

**N** うん。僕が書いて下さいとお願いしています。

**K** 岩松さんが書かれた『船上のピクニック』は素晴らしいですね。本当にあれにはびっくりしました。僕は40何人の出演者が出てくるお芝居なんか書いたことがないですし、ましてや55歳以上の方ばかりですよ。書き手としては制約がすごい。

**N** それこそ一番上が来年の上演の時には、83歳になっているの。

**K** 83歳…。まずは飲み友達にならないといけなのではないかって(笑)。55歳以上の方が集まるシチュエーションをいろいろ考えました。同窓会とかはありきたりでつまらないと思ながらも、同窓会に近い、ある時代を共有していた人たちがまた集まるというのはい

いと。例えば、外国に住んでいる恩師が危篤になったりして、外国に集まって来た教え子とその家族みたいな設定はどうですか？例えば

オーストラリアとか、ああいうもの凄く明るいところがいいと思います。

**N** みんな日本から行くわけ？ちゃんと着くかな(笑)。面白いかもね。でも、台詞を覚えるのが大変だよ(笑)。ゴールド・シアターにケラリーノ・サンドロヴィッチさんが、無事書いていただけるとう

れしいと思っています。それでは今日は本当にありがとう。



ケラリーノ・サンドロヴィッチ  
東京都出身。1982年、ニューウェーブバンド・有頂天を結成。並行して85年に劇団「健康」を旗揚げ、演劇活動を開始する。92年の解散後、翌93年に「ナイロン100°C」を始動。99年には「フロズン・ビーチ」で第43回岸田國士戯曲賞を受賞。以後、受賞多数。近年は映像分野でも活躍。近作に「ナイロン100°C公演「わが間」」,「Bunkamura公演「どん底」」,映画「罪と罰」が来春公開予定。